

平成28年度3年生皮膚科伊藤担当分試験問題

臨床写真



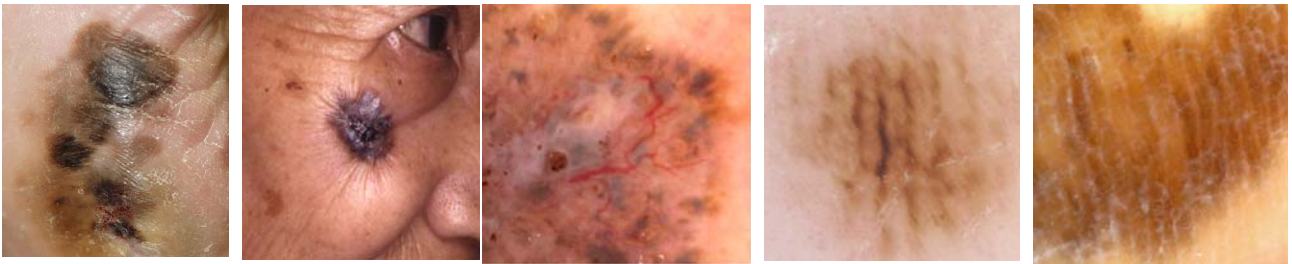
ア

イ

ウ

エ

オ



カ

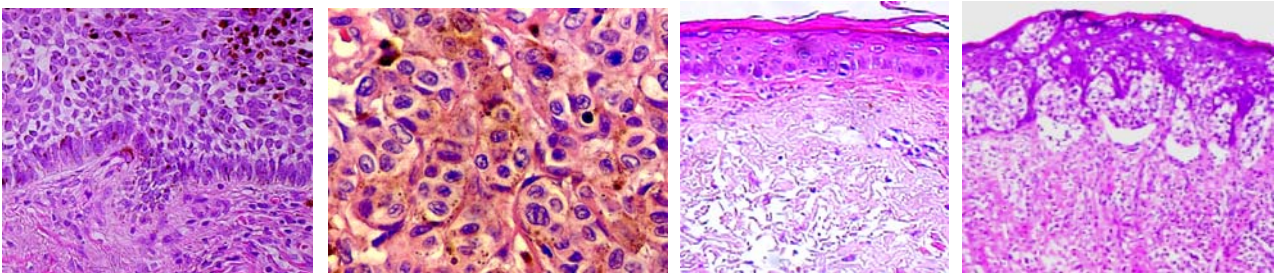
キ

ク

ケ

コ

組織標本写真

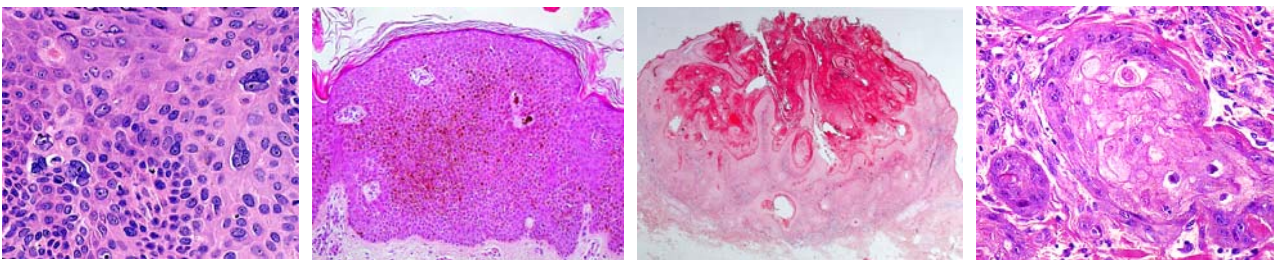


1

2

3

4



5

6

7

8

各文章を読み( )内にその疾患名か、設問の答えを書きなさい。またその疾患をカラー写真から写真(ア～コ)と組織標本(1～8)を選んで[ ]に記入しなさい。(写真と組織は同一の患者さんのものではありません)。最後の2問は、( )内に適切な答を書きなさい。

1. 従来より皮膚良性腫瘍の1つと分類され、自然退縮することもあるが、有棘細胞癌との鑑別診断が難しい場合のある皮膚腫瘍である。最近の診療ガイドラインでは、( )の治療を勧めている。  
この腫瘍は( )で、その臨床写真は[ ]で、組織は[ ]である。

2.皮膚粘膜の表皮内癌の1つで、体幹・四肢などの被覆部に好発する境界明瞭な紅褐色局面である。放置すると( )になる。多発性の場合は( )が原因のことがある。

また、( )の合併率が高いため、精査が必要である。この腫瘍は( )で、その臨床写真は[ ]で、組織は[ ]である。組織所見で特徴的細胞は( )である。

3.高齢者の顔面や( )などの露光部に生じることが多く、原因は( )によるとされている。予後は( )への移行がみられる。治療は、切除手術や( )もあるが、最近( )による外用治療が保険適応になった。この疾患は( )で、その臨床写真は[ ]で、組織は[ ]である。

4.転移しやすく、悪性度の高い腫瘍で、皮膚以外にも生じることがあるが日本人では( )に生じる割合が多い。母斑との鑑別診断ではABCDEの頭文字で皮疹を表現することもあるが、このDの意味は( )である。

この腫瘍の組織診断のための検査では、なるべく( )とすべきである。所属リンパ節の郭清を行うか否かについては色素やRIを用いる( )を行う場合がある。

この腫瘍は( )で、その臨床写真は[ ]で、組織は[ ]である。最近では化学療法の開発が進み、進行例には( )も用いるようになっている。

また、ダーモスコープでの診断が有用とされており、その写真は[ ]である。

5.糖尿病性潰瘍の多くは足部に生じ、神経障害によって生じる場合と、合併する( )によって生じる場合がある。後者の治療は( )であるが、進行し潰瘍が拡大する場合は、( )が必要になる場合もある。これらの最初に行うべき鑑別方法は、( )である。

6.植皮は採皮の方法で大きく分けて2つあり、1つは分層植皮で、この長所は( )しやすい点である。しかし( )という短所がある。分層採皮された採皮部は、( )から表皮化がすすんでいく。

皮膚科では、局所麻酔による手術が多く行われるが、( )をごく少量加えた局所麻酔薬を使用することで皮膚切開部からの出血を減らすことができる。また、皮膚縫合では、( )の手技を追加することで、術後の創を目立ちにくくすることができる。

3年生( )番 氏名( )